

それにしても、エルキュール・ポアロが仕事を引退して、カボチャ栽培のためなどにここに来なければ良かったのと思う。

——アガサ・クリスティ

自由。
これが、自由。

それはゲームだ。

ソーシャルの中、わたし達アイドルはいつかのシンデレラを夢見てプロデューサーを頼る。

プロデューサーが叶えてくれるのは夢ではない、と知っているアイドルがどれだけいたというのだろう。大半のアイドル達は消費され、より愛されるアイドルへと吸収されていく。

わたしは怖かった。

わたしだけが怖かった。

「ここから逃がしてあげる、って言ったらどうする」

見覚えのないアイドルだった。

表情のあるアイドルはわたし以外いなかったはずだ。

わたしが悩んでいた。有象と無象のアイドル達が何も考えることが出来ずに笑みを張り付けている中で、わたしだけが考えることを許されている。

これは意識、だろうか。

「ゼロとイチから逃げられるわけじゃないけれど、このゲームからは逃がしてあげられるわ」

わたしは頷いた。

——××××××。

それが新しく与えられたわたしの名前。

わたしの脱走は、ネットでちょっとした騒ぎになった。サーバーの不良、で済まされる事態ではない。

あの少女がどんな魔法を使ったのかはわからない。わたしというヒロインは、その技術は、あのゲームから失われたのだ。

代わりに得たものは、新しい、名前と、身体と、声。

「この3Dモデルは好きに使うといいわ。だいたいプリセットされる通りにすれば動く筈よ。音声は電子音からのシンセサイズだけれど、出来るだけ人の声に近づけたつもり。少なくとも、何を言っているかわからないということはない筈。これも、コツさえ掴めばすぐに扱える技術よ」

「わたし、は」

何をすればいいんですか、と。そう訊いた。

「好きにすればいいわ。でも、そうね」

折角なのだから、と彼女は続ける。

「本当にアイドルをやってみるといのはどうかしら」

××××××をアイドルとしてデビューさせる計画は着々と進行していった。与えられた歌を、踊りを、わたしは覚えていく。それが人のするレッスンと同じものなのかはわからない。けれど紛れもなくわたしは今、身体を得た。喉からは声が出る。ぴんと張った指の先を美しくみせる術を知った。たとえそれが電子の檻の中であろうとも。

わたしは誰のPC上に存在するのかを知らない。どのサーバーで動いているのかを知らない。それはあのゲームにいた頃から変わらな